

わが国における新型コロナウイルス（COVID-19）感染者への偏見や差別意識に寄与する要因 大学生における探索的検討

著者	福井 義一
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	172
ページ	123-139
発行年	2022-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00004199

わが国における新型コロナウイルス（COVID-19）感染者への 偏見や差別意識に寄与する要因

——大学生における探索的検討——

福井 義一

抄録：

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴って、わが国では本来は非のないはずの感染者に対する偏見や差別的言動を耳にする機会が増えた。こうした偏見や差別意識は感染の秘匿への圧力となり、公衆衛生上の脅威となるため、その予防や対策のために COVID-19 感染者への偏見や差別意識の寄与因を検討する必要がある。そこで本研究では、COVID-19 感染者への偏見や差別意識との関連が予測される変数群を用いて、その寄与因を探索的に検討した。245名の大学生がオンライン調査に参加した。結果から、大学生において COVID-19 感染者への偏見や差別意識は全般的に抑制されていることと、行動免疫システムや COVID-19 恐怖、二分法的思考、文化的自己観、自己愛的甘え、正義感などが偏見や差別意識に寄与していることが見出された。感染者への偏見や差別意識への寄与因について、風邪やインフルエンザ感染者にも共通する要因と、COVID-19 感染者に特有の要因に分けて考察された。

キーワード：新型コロナウイルス感染症，COVID-19，偏見，差別意識，大学生

2019年末に中国の武漢で最初に感染が報告された新型コロナウイルス（以後、COVID-19）は、瞬く間に世界を席卷し、2020年1月には世界保健機構（WHO）が公衆衛生上の緊急事態を宣言した。COVID-19のさらなる感染拡大につれて、自粛要請や非常事態宣言の発令、都市のロックダウンなどの行動制限を余儀なくされたことで、我々の生活様式は大きく様変わりした。そのことによる経済的なダメージもさることながら、長期間にわたって他者とのつながりが断たれるという前代未聞のストレスが我々の心身に及ぼす悪影響は計り知れない（例、De Girolamo, Cerveri, Clerici, Monzani, Spinogatti, Starace, Tura, & Vita, 2020; Golberstein, Wen, & Miller, 2020; 梶谷・土本・佐藤, 2021; 岡田, 2021; Quervain, Aerni, Amini, Bentz, Coyne, Freytag, Gerhards, Papassotiropoulos, Schick Tanz, & Schlitt, 2020; Shigemura, Ursano, Morganstein, Kurosawa, & Benedek, 2020; 四方田, 2020）。

COVID-19 禍における偏見や差別意識に基づく行動

加えて、わが国においても COVID-19 の感染拡大の防止を目的として、政府からの自粛要請が出されると、ある種の偏見や差別意識に基づくと思われる事件の報

道が目を引きようになった。政府からの自粛要請に従わない（ように見える）人を過剰に攻撃するいわゆる「自粛警察」がその一例である。西日本新聞（2020/4/24）は、都道府県を跨いだ移動の自粛が要請されているからという理由で、地元ナンバー以外の車両に傷をつけたり、煽ったりする行為を報じた。さらに、感染が多発していた地域から、非常に感染者が少なかった地域への引っ越しに伴い転入届を出そうとした男性が、2週間後に来ようと言われて、受け取りを拒否された事例もある（斉藤, 2020）という。他にもこうした報道には枚挙に暇がない。

このような偏見や差別意識は、感染時には我々を助けてくれるはずの医療従事者に対する嫌がらせにも発展し、看護師の子どもが保育園から登園を拒否されたり、病院職員が美容室への入店を拒否されたりする事態が報じられた（NHK, 2020）。また、日本看護協会（2020）の調査では、COVID-19 感染症対応による労働環境の変化や感染リスク等を理由に挙げた離職者が15.4%に達したことや、20.5%の看護職員が「差別・偏見にあった」と回答したことが分かった。

さらに、こうした偏見や差別意識は、本来であればその責を問われない被害者であるはずの感染者やその

周辺にも及んでいる。例えば、朝日新聞(2020/4/8)では、集団感染が確認された某大学やその学生に対する誹謗中傷が相次ぎ、その中には「大学に火をつける」とか「感染した学生の住所を教えろ」というエスカレートした内容のものもあったことが報じられた。また、NEWSポストセブン(2020/12/12)によると、感染した従業員に対して、無給での休業を「自主的に」選ばされて、抵抗すると退社を仄めかされるという出来事もあったという。他にも、サッカー部員ら約100人が感染した高校では、インターネット上で誹謗中傷され、生徒らの写真が拡散されたり、ラグビー部員50人以上が感染した大学で、部員でない学生も教育実習やアルバイトを断られたりした(読売新聞, 2020/8/20)。このように、COVID-19感染者に対する世間の風当たりは非常に厳しいと言える。

COVID-19感染症のパンデミックによって生じたこのような偏見や差別意識は、単に非人道的であることだけが問題なのではなく、感染者に対する隠蔽圧力になりかねない点で公衆衛生上の脅威を招くことが問題なのである。感染者は、偏見や差別を恐れるあまり、感染の恐れを示す体調不良や感染が判明した者との接触歴、あるいは感染自体などを秘匿するに至るため、公衆衛生上の一次予防や二次予防の観点からも重大な障害となる可能性がある。政府はこうした事態を受けて、新型コロナウイルス感染症対策分科会の下に「偏見・差別とプライバシーに関するワーキンググループ」を設け、差別を受けた被害者に対する支援や法整備の必要性について議論した。その後、法務省(2021)が「STOP! コロナ差別」というキャンペーンを打つなどの対策を進めているが、その実効性については不明である。

こうしたキャンペーンでは、「コロナをおそれて、過剰な反応になっていませんか?」と呼びかけ、「正しい知識を持つことで差別を防ごう」というメッセージが打ち出されている。しかしながら、COVID-19感染者に対する偏見や差別意識には、恐怖や知識不足以外にも様々な要因が影響していることが容易に推測される。こうした未知の感染症に対する偏見や差別意識が形成される心理学的な背景要因やその形成メカニズムについて検討することは、今後も発生しうるパンデミック事態において、不要な偏見や差別による社会全体の不利益を予防したり、その対策を講じたりする上でも重要な意義があると思われる。

わが国における COVID-19 感染者への偏見や差別意識の先行研究

しかしながら、わが国において COVID-19 と偏見や差別について取り上げた研究は未だ少ない。八木(2021)は、COVID-19 のパンデミックにおける差別と偏見についての論考において、「自粛警察」や「コロナ自警団」の非人道的な行動を「差別主義と排外主義の横行」と断じ、権威主義的パーソナリティの概念を用いて説明を試みた。北口(2021)は、COVID-19 感染症禍における差別と人権について、情報リテラシーの観点から検討する中で、不安心理とフェイク情報の拡散、誤った「正義感、義憤」の観点から説明を試みた。他にも、法律(辻村(伊藤), 2021)の観点からの論考や、学校現場における「コロナいじめ」の問題を取り上げる中で COVID-19 感染者差別についてふれた先行研究(阿形, 2021)もあるが、これらはいずれも心理学的観点からの実証的な検討ではなかった。数少ない心理学的実証的研究としては、COVID-19 感染者の特性に対するステレオタイプを20の形容詞対からなるSD法により測定し、社会性と活動性の2つの因子を見出し、感染脆弱意識が前者に影響を及ぼすことを示した山本・岡(2021)が挙げられる。ただし、ステレオタイプをSD法で測定することの妥当性についての検証が不足しているという点と、他の感染症との比較がなされていない(山本・岡, 2021)という点で限界があると考えられる。また、感染者以外に対する偏見や差別意識の研究としては、外国人に対する排斥の態度について検討したもの(山縣・寺口・三浦, 2021)があるが、COVID-19 感染者に対する偏見や差別意識に焦点を当てた実証的研究は、筆者の知る限り山本・岡(2021)を除いて見当たらない。そこで、本研究では、COVID-19 感染症患者への偏見や差別意識を直接的に測定する尺度を作成し、症状や感染経路こそ類似してはいるが致死率や重症度が異なる風邪・インフルエンザへの偏見や差別意識と比較するとともに、その背景要因について実際の調査研究を通して探索的に検討することを目的とした。

COVID-19 感染者への偏見や差別意識に寄与する要因

偏見や差別意識に対する複数の寄与因が既に知られている。本研究では、先行研究で偏見やステレオタイプ、差別意識に影響することが示唆される、またはその可能性があることが予測される変数を用いて、探索的に検討する。

近年、感染者に対する偏見や差別意識を説明する最

も有用な概念は、行動免疫システムであろう。これは、進化心理学の枠組みから、Schaller (2011) によって提唱された概念であり、危険な感染症から身を守るために、その徴候に対して嫌悪感を喚起し、感染リスクを最小化するための行動選択へと導くという作用がある (Schaller, & Duncan, 2007; Schaller, & Park, 2011)。実際、感染症への脅威が高い場合には、外国人移民に対する否定的態度 (Faulkner, Schaller, Park, & Duncan, 2004) や高齢者への偏見 (Duncan, & Schaller, 2009; 石井・田戸岡, 2015) が強まること、感染リスクの高い妊娠第一期の女性においては、妊娠の他の段階よりも自国びいきのバイアスが高まること (Navarrete, Fessler, & Eng, 2007) などが報告されている。こうしたことから、行動免疫システムの活性化が、COVID-19 感染者への偏見や差別意識にも影響すると考えられる。行動免疫システムの活性化の指標として、易感染性と感染嫌悪という二次元からなる感染脆弱性意識尺度 (Duncan, Schaller, & Park, 2009) が知られている。前者は感染症へのかかりやすさについての予測や信念という認知的側面を、後者は感染の可能性を高める状況に対する不快感や嫌悪感という情動的側面をそれぞれ示す。本研究では、こうした行動免疫システムの個人差が、COVID-19 感染者への偏見や差別意識に及ぼす影響について検討する。

COVID-19 に対する恐怖感は、こうした行動免疫システムの活性化の自然な帰結として亢進すると考えられ、感染者への偏見や差別意識に影響する可能性が高い。過去にも、災害などの非常事態には、恐怖がパニックを引き起こし、流言飛語やデマが燎原の火のごとく広がったせいで、差別された側の多くの命が失われる事態にまで至った。こうした例として、古くは関東大震災時の在日外国人への虐殺が真っ先に挙げられるだろう。最近では、東日本大震災時の被災者への差別的言動が記憶に新しい。感染症では、ペストやコレラなどの伝染病の流行時における社会的弱者に対する容赦ない差別 (例として、安保 (1989) 参照) はもちろんのこと、ハンセン病や HIV の患者が受けた非人道的な差別的扱いによる艱難辛苦については、綴る言葉が見つからないほどである。致死率がやや高く、未知の感染症として登場した COVID-19 に対する恐怖も、過去の感染症禍で見られたのと同様に、偏見や差別に直接的につながっていると考えられる。そこで本研究でも、COVID-19 に対する恐怖感が感染者への偏見や差別意識を促進すると予測した。

次に、真面目に感染予防の対策を取っているほど、

そうした対策を取らないいい加減な他者に対する怒りが強まる可能性がある。そこで、感染対策を真剣に取っている者ほど、COVID-19 感染の責を感染者の感染対策の不徹底に帰属するため、感染者への偏見や差別意識も強まると予測した。そこで、後述するように、厚生労働省 (2020) の「新しい生活様式の実践例」により推奨されている各種の予防対策行動の頻度を測定し、その影響を検討した。

続いて、COVID-19 感染者への偏見や差別意識に影響する可能性があるパーソナリティ要因などの個人内要因について検討する。

二分法的思考は、物事を白か黒か、有か無か、善か悪か、敵か味方かなどのように二者択一的にラベリングする認知的バイアスに相当し、厳罰傾向との関連 (向井・三枝・小塩, 2017) が指摘されている。二分法的思考は、十分な証拠や検証がないまま人々を容易に内集団 (味方) と外集団 (敵) にカテゴライズさせることで、外集団に対する攻撃性を誘発する一因となると考えられる。二分法的思考と類似した概念である構造化欲求も、ステレオタイプ的な対人認知との関連が知られている (例, Neuberg, & Newsom, 1993)。以上のことから、二分法思考が強い者は、COVID-19 感染者を短絡的に悪や敵と決めつけ、偏見や差別意識を募らせる可能性があるると予測される。

文化的自己観は、ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提 (北山, 1995; Markus, & Kitayama, 1994) であり、西洋や北米に典型的な相互独立的自己観と、日本を含む東アジア圏で優勢な相互協調的自己観からなる。前者は、個人は他者から分離していて、独自性の主張が重んじられるという考え方を指すのに対して、後者は、個人は相互に分かちがたく、集団における調和が重んじられるという考え方を指す。わが国における COVID-19 感染者への偏見や差別意識には、後者が密接に影響しているように見受けられる。例えば、感染は自己責任であると見なす風潮が挙げられる。ここでいう自己責任という概念は、極めて日本的なものであり、他人に迷惑をかけた者に対するいかなる批判も攻撃も正当化される (内田, 2021) という理屈が垣間見える。実際に、三浦・平石・中西 (2020) と三浦・平石・中西・Ortolani (2021) は、「新型コロナウイルスに感染した人がいたとしたら、それは本人のせいだと思う」と「新型コロナウイルスに感染する人は、自業自得だと思う」という2問への回答を、日本とアメリカ、イギリス、イタリア、中国で比較した結果、わが国において突出して

得点が高いことを報告した。こうした判断は、個人々独自の論理的演繹の帰結として生じたのではなく、結果的に迷惑をかける側が悪いという社会的合意の存在が前提にあり(内田, 2021), 相互協調的の自己観によるそれへの同一化から発生すると考えられる。それに対して、西洋社会では相互独立的の自己観が確立されているため、感染者への責任のなすりつけが生じにくいと考えられる。そこで本研究では、相互独立的の自己観と相互協調的の自己観は、COVID-19感染者に対する偏見や差別意識にそれぞれ負と正の正反対の影響を及ぼすと予測した。

他にも、他人が自分に配慮してくれて当然という甘えの感覚も、COVID-19感染者への偏見や差別意識との関連が疑われる。例えば、ある個人が自分は頑張っているお陰で感染していないと考えているとすると、感染者はその努力を怠ったせいで感染したことになる。自他の区別が不明瞭で、他者が自分と同程度に自分の健康に配慮してくれて当然という子どもじみた甘えの感覚が強ければ、COVID-19感染者に対する態度は当然のことながら否定的になると思われる。筆者の知る限り、こうした自己愛的甘えとステレオタイプの関連を検討した研究は皆無であるが、甘えは極めて日本的な概念である(土居, 1971, 2001)ことから、上述した相互協調的の自己観とも密接に関連している可能性もある。本研究ではこうした自己愛的甘えがCOVID-19感染者への偏見や差別意識に及ぼす影響についても探索的に検討する。

仮想的有能感は、根拠となる経験の有無に関係なく、他者の能力を軽視することで維持されている有能さの感覚(速水, 2006; 速水・木野・高木, 2004)に相当し、他者を低く評価するという点でスティグマとの類似性(渡邊・森本, 2021)が指摘されている。実際、仮想的有能感は厳罰傾向を直接的に促進すること(向井他, 2017)、仮想的有能感が高い者は内集団メンバーには優位の、外集団メンバーには劣位の価値づけをすることで、後者の排除を正当化するスティグマを持ちやすいこと(沼田・井上・朱, 2011)、さらには仮想的有能感がいじめ加害経験と正の相関を示すこと(松本・山本・速水, 2009; 山本, 2007)が指摘されている。その一方で、仮想的有能感と認知症に対するスティグマとは関連がないという報告もある(渡邊・森本, 2021)が、認知症には本人に罹患の責がないことが明確であり、回答者の当事者意識が低いことから感染者に対する偏見や差別意識とは性質が異なると考えられる。そこで、仮想的有能感とCOVID-19感染者への

偏見や差別意識にも正の影響を及ぼすと予測した。

「自粛警察」という言葉に表れるように、行動制限などの社会的ルールを破った者に対する偏見や差別意識に基づく非人道的行為が、あたかも正義であると信じ込まれている側面がある。その背後には、誤った正義感や義憤(北口, 2021)、歪んだ正義(大治, 2020)、正義中毒(中野・ヤマザキ, 2020)といった言葉で表現されるような、行き過ぎた正義感の暴走が伺える。これらのことから、自身が社会的規範を順守する傾向が強いほど、そして他者にその順守を求める傾向が強いほど、さらにそれを破った他者に怒りや攻撃衝動が強いほど、規範からの逸脱者に対する偏見や差別意識は強まるであろうと予測される。そこで本研究では、これらの概念を正義感の一側面であると捉え、社会規範意識がCOVID-19感染者への偏見や差別意識を助長すると予測した。

さらに、前述した三浦他(2020, 2021)の結果は、「(COVID-19への)感染のように、ある人物に起こった不運な出来事の原因を、そのような因果関係の推定が物理的に不可能であるにもかかわらず、その人物の過去の道徳的失敗に帰する」(三浦他, 2020, 2021)という内在的公正推論に基づくと考察されている。こうした推論は、より一般的な正当世界信念の影響下にあると思われる。道徳的価値の低い人に対して、日本人はアメリカ人よりもそのように推論する傾向が強いことが見出されている(Murayama, & Miura, 2021; Murayama, Miura, & Furutani, 2021)ことから、わが国では、正当世界信念が強いほど、COVID-19感染者に対する偏見や差別的態度が強化されることが予測される。

さらに、このような偏見や差別意識の行動的発露は、個人が有する怒り表出の程度や適切性に依存すると思われる。そこで本研究では、怒り表出の行動的側面を測定し、COVID-19感染者への偏見や差別意識への寄与を検討した。

これらの概念の中には、ある程度の相関関係にある変数群の存在が予想されるため、本研究ではこうした概念を測定する変数群とCOVID-19感染者への偏見や差別意識の相関分析にとどまらず、互いに他の変数の影響を統制した重回帰分析によって、各変数がCOVID-19感染者への偏見や差別意識に及ぼす影響について検討した。

本研究の目的

本研究の目的は、COVID-19感染者への偏見や差別

意識を測定する尺度を作成し、実際にわが国における COVID-19 感染者への偏見や差別意識の実態について調査することであった。その上で、偏見や差別意識に寄与する要因を探索的に検討することを目的とした。COVID-19 感染者への偏見や差別意識を測定する際に、社会的望ましさの影響で、本来そう思っている程度よりも割り引かれた回答が生じる可能性がある。そのため、COVID-19 感染者に対する支持的・援助的な態度を同時に問うことで、偏見や差別意識だけを問われているときよりも、率直な態度を表明しやすくなるよう工夫した。さらに、風邪・インフルエンザに対する態度も測定することで、COVID-19 だけに回答者の意識が焦点化されることを避けるよう努めた。それでも生じることが予想される社会的望ましさの影響を分析段階で統制するために、社会的望ましさも同時に測定した。

方法

調査協力者：

18～27歳の大学生 260名の協力を得た。記入漏れ等による無効回答があった10名と、自身や同居家族がPCR検査で陽性になった経験があると回答した5名のデータを除外し、最終的に245名（男性111名、女性134名）のデータを用いた。平均年齢は20.47歳（ $SD = 1.41$ 歳）であった。

調査期間：

2020年11月25日から同年12月17日の期間に、クアルトリクス合同会社のオンライン・アンケート・ツール Qualtrics (ver. 2020) により回答を得た。この時期は、感染流行の第3波に向けて、徐々に感染者が増加しつつあった時期に相当する。

尺度構成：

COVID-19感染者への偏見や差別意識を測定するために、エイズに対する態度尺度（西, 2000）を改変して尺度を作成した。本尺度は、忌避的態度4項目（項目例「エイズ患者が身近にいれば、その人と距離を保つようになるかもしれない」）、偏見的態度4項目（項目例「エイズ患者に対してあまりいいイメージはない」）、支持的・援助的態度4項目（項目例「エイズ患者と接する際は、その人が安心していられるように接したいと思う」）の全12項目からなる3つの下位尺度を有し、9件法（1：全くそう思わない～9：非常にそ

う思う）で回答を求めるものである。

本研究では、項目文中の「エイズ患者」を「新型コロナウイルス患者」に置換して使用した。ただし、COVID-19はエイズとは感染経路が異なり、飛沫感染の可能性があることから、項目1「新型コロナウイルス感染者が身近にいれば、その人と距離を保つようになるかもしれない」については、物理的な距離と考えると適切な反応と見なされる可能性がある。そのため、心理的に距離を取るようになるという意味を反映するように、「身近な人が新型コロナウイルス感染症に感染したら、その人と連絡を取らなくなるかもしれない」に改変した。さらに、項目6「エイズ患者の中には同性愛者や麻薬使用者も多いので、自業自得な点も多い」と項目8「性交渉でエイズになった人を気の毒だと思わない」については、エイズとは違って過失と見なされやすい行為がそれほど明確でなく、多岐にわたる可能性があることから、そうした表記を削除して、項目6は「新型コロナウイルス感染症患者には、自業自得な点も多い」に、項目8は「新型コロナウイルス感染症に感染した人を気の毒だと思わない」にそれぞれ改変した。また、風邪・インフルエンザ患者への偏見や差別意識と比較するために、「新型コロナウイルス患者」を「風邪・インフルエンザ患者」に置換した尺度も作成した。なお、全ての尺度ごとに、項目の提示順序はランダムとした。

行動免疫システムの活性化と同一視される感染への脆弱性意識を測定するために、Perceived Vulnerability to Disease (PVD) 尺度（Duncan, et al., 2009）の日本語版である感染脆弱意識尺度（福川・小田・宇佐・川人, 2014）を用いて、易感染性（項目例「風邪やインフルエンザなどにとっても感染しやすい」）と感染嫌悪（項目例「誰かと握手したあとは、手を洗いたくなる」）の2つの下位尺度得点を得た。15項目からなり、7件法（1：非常にあてはまらない～7：非常にあてはまる）で回答を求めた。いずれも得点が高いほど、行動免疫システムの活性化の程度が強いことを示す。

COVID-19への恐怖感を測定するために、Fear of COVID-19 Scale（Ahorsu, Lin, Imani, Saffari, Griffiths, & Pakpour, 2020）の邦訳版である日本語版新型コロナウイルス（COVID-19）恐怖尺度（太刀川・根本・田口・高橋・小川・白鳥・高橋, 2020）を用いて、COVID-19への恐怖感得点を得た。7項目からなり、5件法（1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる）で回答を求めた。開発されたばかりの尺度ではあるが、十分な信頼性と妥当性が確認されている

(Wakashima, Asai, Kobayashi, Koiwa, Kamoshida, & Sakuraba, 2020)。得点が高いほど、COVID-19への恐怖感が強いことを示す。

日常的な感染予防対策行動へのコミットメントの程度を測定するために、厚生労働省(2020)の「新しい生活様式の実践例」により推奨されている予防対策を参考に、独自に尺度を作成した(Appendix 1参照)。17項目の感染対策行動の頻度(項目例「換気が悪い場所には行かないようにしている」、「他の人と、近い距離での会話や発声をしないようにしている」など)について、5件法(1:まったくしない~5:いつもする)で回答を求めた。全17項目の内的整合性($\alpha = .874$)が十分に高かったため、合計得点を項目数で除した値を感染予防対策行動の得点として用いた。得点が高いほど、日常的に感染予防対策行動をとる頻度が高いことを示す。

二分法的思考を測定するために、二分法的思考尺度(Oshio, 2009)を用いて、二分法の選好(項目例「何事も好き嫌いをはっきりしたほうがうまくいく」)と二分法的信念(項目例「世の中には「成功者」と「失敗者」しか存在しない」)、損得思考(項目例「何が安全で何が危険なのかをはっきりさせたい」)の3つの下位尺度得点を得た。15項目からなり、6件法(1:全く当てはまらない~6:非常によく当てはまる)で回答を求めた。いずれも得点が高いほど、二分法的思考の各傾向が強いことを示す。

文化的自己観を測定するために、相互独立的-相互協調的自己観尺度改訂版(高田・大木・清家, 1996)を用いて、相互独立性の独断性(項目例「他者が自分の考えを何と思おうと気にしない」)と個の認識・主張(項目例「自分の意見はいつもはっきり言う」)、相互協調性の評価懸念(項目例「他者の視線が気になる」)と他者への親和・順応(項目例「仲間の中で和を維持することは大切だ」)の4つの下位尺度得点を得た。20項目からなり、7件法(1:まったくあてはまらない~7:ぴったりあてはまる)で回答を求めた。いずれも得点が高いほど、該当する自己観が強いことを示す。

自己愛的な甘えを測定するために、被奉仕志向性尺度(大和田・鈴木・川田, 2013)を用いて、許容的奉仕の期待(項目例「私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら、頼まれた友だちはノートを貸すことを、私は当然と思うことがある」)と配慮的奉仕の期待(項目例「教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを、私は当然と思うことがある」)の2つ

の下位尺度得点を得た。12項目からなり、7件法(1:全くそう思わない~7:とてもそう思う)で回答を求めた。いずれも得点が高いほど、自己愛的甘えの傾向が強いことを示す。

仮想的有能感を測定するために、仮想的有能感尺度(速水, 2006)を用いて、仮想的有能感得点(項目例「自分の周りには気のきかない人が多い」)を得た。11項目からなり、5件法(1:全くそう思わない~5:よく思う)で回答を求めた。得点が高いほど、仮想的有能感が強いことを示す。

正義感の一側面としての社会的規範について、金子(2007)による順守規範意識尺度と順守要求規範意識尺度、対規範逸脱攻撃反応尺度を用いた。順守規範意識尺度からは、公共規範(項目例「歩きたばこをする」)と配慮規範(項目例「狭い通路ですれ違う時、道をゆずる素振りを見せない」)の2つの下位尺度得点を得た。10項目からなり、5件法(1:絶対にやらない~5:いつもする)で回答を求めた。得点が高いほど、自身が社会的規範を順守しようとする意識が強いことを示す。順守要求規範意識尺度からは、公共規範要求(項目例「誰かがゴミをポイ捨てしているのをあなたが見た」)と配慮規範要求(項目例「授業中にあなたの近くで誰かが私語をしていた」)の2つの下位尺度得点を得た。12項目からなり、5件法(1:まったく気にならない~5:非常に気に障る)で回答を求めた。得点が高いほど、他者に対して社会的規範の順守を要求する意識が強いことを示す。対規範逸脱攻撃反応尺度からは、非難・不快(項目例「マナーに反する行為をされてイライラすることがある」)と報復(項目例「マナーに反する行為をした相手に「しかえしをしたい」と思うことがある」)の2つの下位尺度得点を得た。8項目からなり、5件法(1:まったくない~5:よくある)で回答を求めた。得点が高いほど、面識のない他者から社会的規範に反する行為をされたときに生じる、怒りの感情や攻撃への衝動が強いことを示す。

怒り表出傾向を測定するために、Müller Anger Coping Questionnaire (Müller, 1993)の日本語版(大竹・島井・曾我・宇津木・山崎・大芦・坂井・西・松島・嶋田・安藤, 1999)を用いて、怒り表出(項目例「机やものをたたいて怒りを表す」)と、怒り抑制(項目例「嫌な人だと思われたくないので腹を立てていることを言わない」)、怒り主張性(項目例「誰かに腹を立てられたらその人に伝えることができる」)、罪悪感(項目例「怒りを爆発させると後で悔やむ」)の4つの

Table 1 新型コロナウイルス感染者に対する態度尺度の因子分析結果

No.	項目内容	I	II
I：支持・援助的態度 ($\alpha = .813$)			
10	新型コロナウイルス感染症患者と接する際は、その人を知つかうように好意的に接したいと思う	.874	.110
9	新型コロナウイルス感染症患者と接する際は、その人が安心してられるように接したいと思う	.734	.064
12	私は新型コロナウイルス感染症患者を支えていく立場でありたいと思う	.643	-.096
11	周囲から差別されている新型コロナウイルス感染症患者がいれば、私はその人をかばい守ってあげると思う	.631	-.122
II：忌避・偏見的態度 ($\alpha = .744$)			
3	身近な人が新型コロナウイルス感染症に感染したら、その人を心の中では避けてしまうかもしれない	-.060	.710
5	新型コロナウイルス感染症患者に対していいイメージはない	.001	.632
7	「新型コロナウイルス感染症」と聞くと、何となく汚らわしい感じがする	.160	.608
2	新型コロナウイルス感染症は危険な病気だから、新型コロナウイルス感染症患者とは関わりを持ちたくない	-.078	.572
4	知人が新型コロナウイルス感染症に感染したと知らされたら、以前と同様に接していくことは難しいだろう	-.056	.500
		因子間相関	-.328

下位尺度得点を得た。23項目からなり、4件法（1：まったくない～4：ほとんどいつもそうだ）で回答を求めた。いずれも得点が高いほど、各傾向が強いことを示す。なお、本研究では怒りを感じた際の反応を行動レベルで測定する必要があったため、罪悪感の得点は使用しなかった。

正当世界信念について、正当世界尺度（今野・堀, 1998）を用いて、因果応報（項目例「この世の中では、悪いことをした者は必ずその報いをうける」）と不公正な現状（項目例「この世の中では、努力や実力が報われない人が数多くいる」）の2つの下位尺度得点を得た。4項目からなり、5件法（1：あてはまらない～5：あてはまる）で回答を求めた。得点が高いほど、前者は、正の投入には正の結果が、負の投入には負の結果がもたらされるという公正な因果原則を信じる程度が強いことを、後者は因果原則から外れた不公正な出来事に対する感受性が強いことをそれぞれ示す。

社会的望ましさを測定するために、Crowne, & Marlowe (1960) による Social Desirability Scale の日本語版の簡易版（北村・鈴木, 1986）を用いて、社会的望ましさを得た。10項目（項目例「料金を払わずに映画館に入って、それをだれにも見られないのなら、たぶんそう思うと思う」）からなり、「0：いいえ」と「1：はい」の2件法で回答を求めた。得点が高いほど、社会的望ましさに従う傾向が強いことを示す。

倫理的配慮：

オンライン調査の最初のセクションで、調査の趣旨や参加の任意性、データの取り扱いと保管方法、匿名性の確保、中止や破棄の権利、成績評価との無関係性、研究成果のフィードバックを希望する場合の請求方法について説明した後、参加に同意した人のみが本調査

に進むことができる仕組みであった。また、未成年者の場合には、保護者の同意が必要であること、保護者の同意がないとオンライン調査に進めないことを説明した上で、両者の同意が得られた場合に、オンライン調査に進むことが可能な仕組みであった。保護者と協力者には、説明事項を記した同意書の控えがファイルで配布された。

結果

感染者への態度尺度の因子分析の結果

COVID-19感染者への偏見や差別意識を測定するためにエイズに対する態度尺度（西, 2000）を改変して作成した尺度について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を繰り返し、最終的に因子負荷量が低かった3項目（項目1, 6, 8）を削除して、支持・援助的態度4項目 ($\alpha = .813$) と忌避・偏見的態度5項目 ($\alpha = .744$) の2因子を抽出した。Table 1に本尺度の因子構造を示した。風邪・インフルエンザについても同様の因子構造を採用して、それぞれの尺度得点を得た（支持・援助的態度： $\alpha = .661$, 忌避・偏見的態度： $\alpha = .769$ ）。いずれも得点が高いほど、その態度が強いことを示す。なお、支持・援助的態度と忌避・偏見的態度の各尺度得点間には、COVID-19感染者 ($r = -.296, p < .001$) と風邪・インフルエンザ感染者 ($r = -.157, p < .05$) で、それぞれ弱い有意な負の相関が見られた。

各感染症に対する態度について、性別と疾患の別による違いを検討するために、性別（男性、女性）×疾患の別（COVID-19感染症、風邪・インフルエンザ）の二要因分散分析を実施した結果、感染者への忌避・偏見的態度について、疾患の別の主効果が有意であった ($F(1, 243) = 141.42, p < .001$) のに対して、性別の

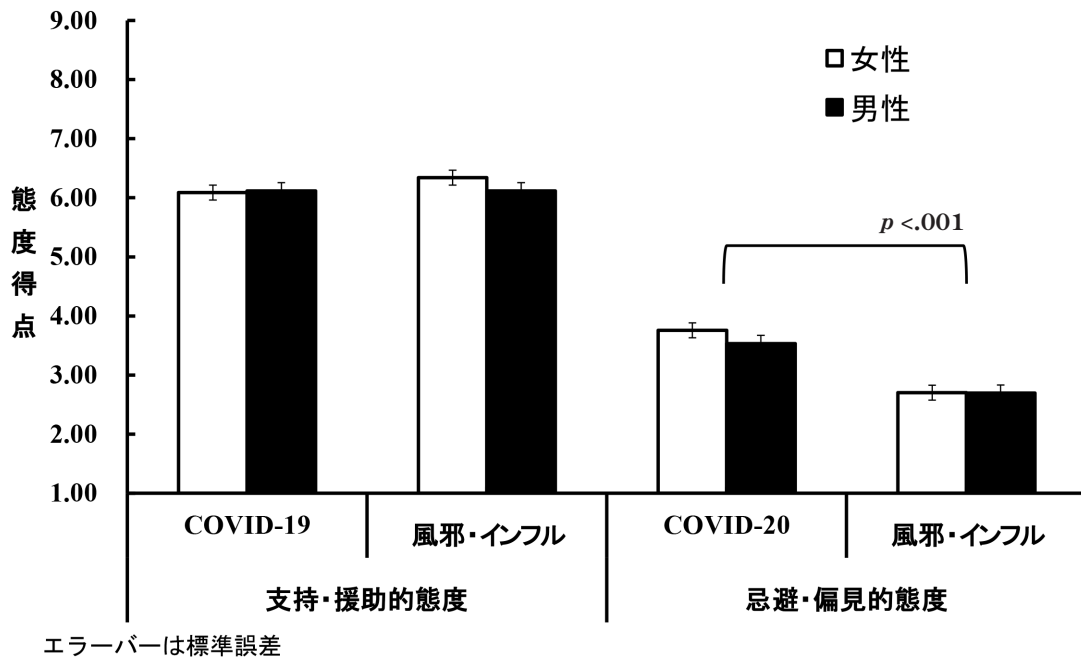


Figure 1 性別による COVID-19 と風邪・インフルエンザに対する態度の違い

主効果と交互作用は有意ではなかった。COVID-19 感染者への忌避・偏見的態度の得点 ($M = 3.65, SD = 1.41$) の方が風邪・インフルエンザ感染者への忌避・偏見的態度の得点 ($M = 2.70, SD = 1.17$) よりも有意に高いことが分かった。理論的な中立的態度を示す 5.0 を基準値とした 1 サンプルの t 検定の結果、いずれも有意に得点が低い (COVID-19 : $t(244) = -14.92, p < .001$, 風邪・インフルエンザ : $t(244) = -30.69, p < .011$) ことが分かった。一方、支持・援助的態度についてはいずれの主効果も交互作用も有意ではなかった。同じく、1 サンプルの t 検定の結果、いずれも基準値の 5.0 よりも有意に得点が高い (COVID-19 : $t(244) = -10.66, p < .001$, 風邪・インフルエンザ : $t(244) = 12.08, p < .011$) ことが分かった。

各変数間の相関分析の結果

次に、各尺度得点間の相関分析の結果を Table 2 に示した。その結果、COVID-19 感染者への支援・援助的態度は、感染嫌悪 ($r = -.172, p < .01$) や感染予防対策 ($r = .121, p < .10$)、二分法的信念 ($r = -.143, p < .05$)、評価懸念 ($r = .169, p < .01$)、他者への親和・順応 ($r = .293, p < .001$)、配慮規範 ($r = .174, p < .01$)、報復 ($r = -.174, p < .01$)、因果応報 ($r = .226, p < .001$)、不公正な現状 ($r = -.147, p < .05$)、怒り表出 ($r = -.198, p < .01$)、怒り抑制 ($r = .191, p < .01$) と有意または有意傾向の弱い相関を示した。

それに対して、COVID-19 感染者への忌避・偏見的態度は、感染嫌悪 ($r = .242, p < .001$) や COVID-19 恐怖 ($r = .305, p < .001$)、感染予防対策 ($r = .171, p < .01$)、二分法の選好 ($r = .228, p < .001$)、二分法的信念 ($r = .183, p < .01$)、損得思考 ($r = .151, p < .05$)、独断性 ($r = -.150, p < .05$)、評価懸念 ($r = .148, p < .05$)、配慮的奉仕の期待 ($r = .199, p < .01$)、許容的奉仕の期待 ($r = .282, p < .001$)、公共規範要求 ($r = .168, p < .01$)、配慮規範要求 ($r = .161, p < .05$)、非難・不快 ($r = .137, p < .05$)、報復 ($r = .124, p < .10$)、怒り表出 ($r = .126, p < .05$) と有意なまたは有意傾向の弱い相関を示した。

一方、風邪・インフルエンザ感染者への支援・援助的態度は、感染予防対策 ($r = .199, p < .01$) や二分法的信念 ($r = -.118, p < .10$)、評価懸念 ($r = .186, p < .01$)、他者への親和・順応 ($r = .317, p < .001$)、配慮的奉仕の期待 ($r = .208, p < .01$)、仮想的有能感 ($r = -.164, p < .05$)、公共規範 ($r = .193, p < .01$)、配慮規範 ($r = .262, p < .001$)、公共規範要求 ($r = .122, p < .10$)、非難・不快 ($r = .114, p < .10$)、報復 ($r = -.158, p < .05$)、因果応報 ($r = .268, p < .001$)、不公正な現状 ($r = -.171, p < .01$)、怒り表出 ($r = -.190, p < .01$)、怒り抑制 ($r = .250, p < .001$) と有意または有意傾向の弱い相関を示した。

それに対して、風邪・インフルエンザ感染者への忌避・偏見的態度は、感染嫌悪 ($r = .276, p < .001$) や COVID-19 恐怖 ($r = .236, p < .001$)、感染予防対策 (r

Table 2 感染者への態度と他の変数の相関分析の結果

	COVID-19		風邪・インフルエンザ	
	支持・援助的態度	忌避・偏見的態度	支持・援助的態度	忌避・偏見的態度
感染脆弱性				
易感染	.055	-.030	.055	-.005
感染嫌悪	-.172 **	.242 ***	-.093	.276 ***
COVID-19 恐怖	.001	.305 ***	.091	.236 ***
感染予防対策	.121 †	.171 **	.199 **	.144 *
二分法的思考				
二分法の選好	-.058	.228 ***	-.094	.040
二分法的信念	-.143 *	.183 **	-.118 †	.058
損得思考	-.014	.151 *	-.005	-.037
文化的自己観				
独断性	.032	-.150 *	-.024	-.079
個の認識・主張	.074	-.091	-.013	-.016
評価懸念	.169 **	.148 *	.186 **	.045
他者への親和・順応	.293 ***	.085	.317 ***	.003
自己愛的甘え				
配慮的奉仕の期待	.100	.199 **	.208 **	.028
許容的奉仕の期待	-.020	.282 ***	.068	.098
仮想的有能感	-.090	.088	-.164 *	.090
正義感（社会規範）				
公共規範	.091	-.079	.193 **	-.059
配慮規範	.174 **	-.061	.262 ***	-.146 *
公共規範要求	.049	.168 **	.122 †	.077
配慮規範要求	-.005	.161 *	.061	.127 *
非難・不快	.044	.137 *	.114 †	.053
報復	-.174 **	.124 †	-.158 *	.183 **
正当世界信念				
因果応報	.226 ***	.057	.268 ***	.128 *
不公正な現状	-.147 *	.086	-.171 **	.106 †
怒り表出				
怒り表出	-.198 **	.126 *	-.190 **	.171 **
怒り抑制	.191 **	-.042	.250 ***	-.024
怒り主張性	-.019	-.015	-.072	.049
社会的望ましさ	-.061	.030	-.079	-.030

*** $p < .01$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

=.144, $p < .05$), 配慮規範 ($r = -.146, p < .05$), 配慮規範要求 ($r = .127, p < .05$), 報復 ($r = .183, p < .01$), 因果応報 ($r = .128, p < .05$), 不公正な現状 ($r = .106, p < .10$), 怒り表出 ($r = .171, p < .01$) と有意または有意傾向の弱い相関を示した。

いずれの感染症におけるどちらの態度についても、社会的望ましさとの間には有意な相関は見られなかった。

各変数が感染者に対する態度に及ぼす影響

さらに、両感染者に対する支持・援助的態度と忌避・偏見的態度をそれぞれ従属変数、性別と社会的望ましさを統制変数、それぞれの態度得点と有意なまたは有意傾向の相関を示した変数のみを独立変数として投入した重回帰分析を行った。その結果、COVID-19 感染者への支持・援助的態度に対する感染予防対策

($\beta = .162, p < .05$) と他者への親和・順応 ($\beta = .161, p < .05$), 因果応報 ($\beta = .185, p < .01$) の正の、感染嫌悪 ($\beta = -.199, p < .01$) と怒り表出 ($\beta = .162, p < .05$) の負の影響がそれぞれ有意であったのに対して、忌避・偏見的態度に対する感染嫌悪 ($\beta = .174, p < .01$) と COVID-19 恐怖 ($\beta = .140, p < .05$), 許容的奉仕の期待 ($\beta = .256, p < .001$) の正の、独断性 ($\beta = -.131, p < .05$) の負の影響がそれぞれ有意であった。

その一方で、風邪・インフルエンザ感染者への支持・援助的態度に対する感染予防対策 ($\beta = .129, p < .10$) と他者への親和・順応 ($\beta = .136, p < .10$), 配慮的奉仕の期待 ($\beta = .153, p < .05$), 配慮規範 ($\beta = .153, p < .05$), 因果応報 ($\beta = .182, p < .01$), 怒り抑制 ($\beta = .117, p < .10$) の正の、社会的望ましさ ($\beta = -.125, p < .05$) の負の影響がそれぞれ有意または有意傾向であったのに対して、忌避・偏見的態度に対する感染嫌

Table 3 感染者への態度を従属変数とした重回帰分析の結果

	COVID-19		風邪・インフルエンザ	
	支持・援助的態度	忌避・偏見的態度	支持・援助的態度	忌避・偏見的態度
感染脆弱性				
易感染				
感染嫌悪	-.199 **	.174 **		.183 **
COVID-19 恐怖		.140 *		.126 †
感染予防対策	.162 *		.129 †	
二分法的思考				
二分法の選好				
二分法的信念				
損得思考				
文化的自己観				
独断性		-.131 *		
個の認識・主張				
評価懸念				
他者への親和・順応	.161 *		.136 †	
自己愛的甘え				
配慮的奉仕の期待			.153 *	
許容的奉仕の期待		.256 ***		
仮想的有能感				
正義感 (社会規範)				
公共規範				
配慮規範			.153 *	-.170 *
公共規範要求				
配慮規範要求				
非難・不快				
報復				
正当世界信念				
因果応報	.185 **		.182 **	
不公正な現状				
怒り表出				
怒り表出	-.145 *			
怒り抑制			.117 †	
怒り主張性				
社会的望ましさ			-.125 *	
R^2	.230 ***	.238 ***	.269 ***	.157 ***

*** $p < .01$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表中の数字は標準偏回帰係数で、有意でない変数の値は割愛

悪 ($\beta = .183, p < .01$) と COVID-19 恐怖 ($\beta = .126, p < .10$) の正の、配慮規範 ($\beta = -.170, p < .05$) の負の影響がそれぞれ有意または有意傾向であった。

なお、抑制変数が存在する可能性もあったため、念のために全変数を投入した重回帰分析も行ったが、社会的望ましさの風邪・インフルエンザ感染者に対する支持・援助的態度についてのみ相関分析とは異なり有意となった以外に、最終的に有意になった変数に違いはなかった。

考察

本研究の目的は、我が国における COVID-19 感染者への偏見や差別意識を規定する要因について探索的に検討することであった。本研究から、COVID-19 感染

者への忌避・偏見的態度の方が、風邪・インフルエンザ感染者へのそれよりも強いことが分かった。また、その促進要因として、感染嫌悪や COVID-19 恐怖、許容的奉仕の期待、怒り表出が、緩和要因として、感染嫌悪や感染予防対策行動、独断性、他者への融和・順応、因果応報が見出された。

感染者に対する態度尺度の信頼性と妥当性

まず、感染者に対する態度尺度について、HIV 感染者に対する態度を測定する尺度 (西, 2000) を改変して使用したことの妥当性について考察する。原版では 3 因子構造であったが、本研究では、原版における忌避的態度と偏見的態度の項目が 1 因子にまとまったため、これを忌避・偏見的態度と名づけたが、いずれも偏見や差別意識を反映する否定的な態度であり、原版

においても他方に対する因子負荷量が比較的高い項目が多かったことから、2因子構造が見出されたことは不自然ではないと考えられる。支持・援助的態度と忌避・偏見的態度の信頼性分析からは、高い内的整合性が確認されたと言える。風邪・インフルエンザ感染者への態度については、COVID-19感染者への態度よりもやや α 係数が低かったが、許容範囲内であると見なした。風邪・インフルエンザ感染者とCOVID-19感染者への態度を比較した結果、支持・援助的態度では差がなかったのに対して、忌避・偏見的態度ではCOVID-19感染者の方が得点が有意に高かったことから、本尺度について一定の基準関連妥当性が確認されたと言える。コロナ禍以前には、風邪やインフルエンザに感染することは自己責任であるという風潮こそあったものの、差別されたり、非人道的な扱いを受けたりすることはなかった。また、コロナ禍では、風邪・インフルエンザ感染者の方がCOVID-19感染者よりもその感染の責を問われにくい。本研究の結果も、こうした現状を反映していると考えられる。もちろん、COVID-19感染者の方が風邪・インフルエンザ感染者よりも偏見や差別意識を強く向けられているとはいえ、それはあくまでも相対的なものであり、実際には1サンプルの t 検定から、全体としては理論的な中立的態度よりも肯定的であることが分かった。このことは、人口の一部に極端な偏見や差別的意識を持つ者がいるものの、大部分の一般大学生ではもともとの偏見や差別的意識は低い水準であることを示唆している。しかしながら、COVID-19感染者への偏見や差別意識の低得点が、さらなる非常時や、自身や身近な者が脅威にさらされるような状況下での行動を直接的に予測するものではないことには、十分な注意が必要であろう。

一方で、支持・援助的態度については、COVID-19と風邪・インフルエンザでは差が見られなかった。このことは、両感染症に対する偏見や差別意識と支持・援助的態度が正反対の概念ではないことの証左でもある。1サンプルの t 検定の結果、いずれの感染症に対する支持・援助的態度も、理論的な中立的態度よりも肯定的であり、本研究の調査対象者は、一般大学生であったことから、素朴に支援や援助の欲求を表明したのかもしれない。さらに、いずれの感染者に対するいずれの態度も、社会的望ましさととの有意な相関は見られなかった。重回帰分析では、風邪・インフルエンザ感染者への支持・援助的態度に対する社会的望ましきの効果が見られとはいえ、本尺度はCOVID-19感染者への偏見や差別意識を測定する尺度としては、一定の

信頼性と妥当性を備えていると言える。

COVID-19感染者への偏見や差別意識に対する寄与因

まず、行動免疫システムの2変数について、易感染性はいずれの態度とも無相関であったのに対して、感染嫌悪は両感染者への忌避・偏見的態度とは正の、COVID-19感染者への支持・援助的態度とは負の相関をそれぞれ示した。本研究の結果は、山本・岡(2021)でも後者のみがCOVID-19感染者へのステレオタイプの一部を予測するという知見と符合する。前者は合理的判断に基づく反応であるのに対して、後者は直観的判断に基づく反応(Duncan et al., 2009)であることから、感染者に対する偏見や差別意識は、決して合理的判断から導出されたものではなく、行動免疫システムの活性化による嫌悪感情の惹起による自動的・反射的反応であることが推察される。ただし、感染嫌悪はCOVID-19感染者への偏見や差別意識に特有の変数ではなかった。むしろ、COVID-19感染者への支持・援助的態度を弱化することで、間接的に偏見や差別意識に寄与すると言える。

COVID-19恐怖は、事前の予想通り両感染者への忌避・偏見的態度と有意な相関を示した。恐怖心が偏見や差別意識を招くという法務省(2021)のキャンペーンにおける表現も極めて正鵠を射ており、対策には不可欠の視点であると言えるが、本研究からはそれ以外の要因に目を向けることの意義が浮かび上がってくる。

感染予防対策行動へのコミットメントは、両感染者へのいずれの態度に対しても正の影響を及ぼすことから、偏見や差別意識に対して促進と抑制という両方向に寄与する可能性があるが分かった。こうした行動の頻度が高い者の中には、自分が頑張っているのに、なぜ感染者はそうしないのかと怒りや敵意を向ける者と、標準的な対策をとっていても感染経路不明の感染者が多いという事実などから合理的に判断して、落ち度がない感染者に対する共感や同情心に基づいて行動できる者が混在していることを示しているのかもしれない。いずれにせよ、この変数もCOVID-19感染者への偏見や差別意識に特有の寄与因ではなかった。

以上の概念とは対照的に、COVID-19感染者への偏見や差別意識に特異的に寄与する変数について、以下に考察する。二分法的思考の各下位概念は、いずれもCOVID-19感染者への忌避・偏見的態度と正の相関を示したのに対して、風邪・インフルエンザ感染者に対する同態度とは無相関であった。つまり、COVID-19

感染者への偏見や差別意識に特異的な影響を示唆する変数群であることが分かった。このことが持つ含意は重要である。小塩 (2010) によると、下位概念のうち、最も強い相関を示した二分法の選好は、「物事を2つに分割して整理することで、理解がうまくいったり気分がすっきりしたりする」という、どちらかと言えば情動的側面に相当すると思われる。一方、二分法的信念は、「世の中の複雑な事象を明確に2種類に分割することが可能である、また世の中の事象は2種類に分割されるような特徴を有しているという信念」(小塩, 2010) に、損得思考は「単に物事を2種類のカテゴリに分割するだけでなく、それぞれの内容が自分にとって損(不利益)であるのか得(利益)であるのかを明確化しようとする志向性」(小塩, 2010) に相当し、前者は認知的判断であるのに対して、後者は二分法的思考それ自体と言うよりも、それに基づく判断や行動的指針に相当すると思われる。このことから、COVID-19感染者への偏見・差別意識が非合理的な情緒的色彩を帯びた判断に基づいていることが分かる。また、小塩 (2010) は、二分法の選好と損得思考が自己愛傾向の不適応的側面と正の相関を示すことを報告していることから、こうした自己中心的な思考様式が不適応的な論理展開の基盤となり、偏見や差別意識につながるという点に、改めて注意喚起が必要であると考えられる。

さらに文化的自己観の独立性と評価懸念も COVID-19感染者への忌避・偏見的態度のみをそれぞれ抑制・促進していることが分かった。前者は相互独立的自己観の、後者は相互協調的自己観の2つの下位概念のうち、それぞれ認知的側面に相当すると思われる。もう一方の下位概念である個の認識・主張や他者への親和・順応は、いずれも行動的側面に相当すると思われる。そのため、予測された方向性の相関ではあったが、これらの2つの下位概念のみが忌避・偏見的態度と相関したのであろう。そもそも、態度と行動には不一致があり (Ehrlich, 1969)、特に道徳や差別問題に触れる行動は態度によって予測されにくいことが知られているが、この結果は、逆に偏見や差別的態度を予測するには、行動的色合いの強い変数では不十分であることを反映しているのかもしれない。いずれにせよ、相互協調的自己観が行き過ぎると、世論に同調・同一化することで、規範からの逸脱者を叩く原動力になる可能性が示唆されたと言える。また、他者から独立して独自性を主張する傾向が抑止力になるとは言え、わが国において長年にわたり広く浸透してきた文化的素

地を一変させることは容易ではない。実際、100年ほど前のスペイン風邪の感染症禍においても、既に自粛文化が蔓延っていたことが分かっており、志賀直哉の小説『流行感冒と石』(志賀, 1919) などからも感染者非難の心性が伺える(磯田, 2020)。相互協調的自己観には、一方で支持・援助的態度を促進するという側面もあるため、変容させると言うよりは、我々のこのような傾性についての自覚を深めた上で、それを活かした何らかの介入につなげる必要があるだろう。

さらに、自己愛的甘えの二つの下位概念も、COVID-19感染者への忌避・偏見的態度とのみ有意な相関を示した。上述したように、本邦において自己愛的甘えと偏見やステレオタイプの関連を検討した研究は見当たらないが、本研究では初めてその関係性が認められた点で意義があると言える。なお、自己愛的甘えと相互協調的自己観との密接な関連の可能性について上述したが、配慮奉仕への期待は、評価懸念 ($r=.130, p<.05$) や他者への親和・順応 ($r=.183, p<.01$) と弱い、許容的奉仕への期待は評価懸念 ($r=.124, p<.10$) と非常に弱い正の相関をそれぞれ示したにとどまったことから、両者は質の異なる概念であることが示唆される。非常に日本的な心性であると言える甘え(土居, 1971, 2001)が、COVID-19感染者への偏見や差別意識を助長することから、外国人などの外集団に対する差別や排斥の報道が目立つ海外とは異なり、感染者叩きはわが国における独自の現象である可能性が示唆される。もちろん、島国であるわが国は諸外国と国境を接しておらず、外国人との接触頻度が近年まで低かったという歴史的・環境的要因が影響している可能性も否めないため、偏見や差別意識を個人のパーソナリティのみに帰属しすぎることは厳に戒めて、文化的観点からも慎重に検討する必要があるだろう。

事前の予想に反して、仮想的有能感は COVID-19感染者への偏見や差別意識と関連しなかった。このことの含意は明確ではないが、他者を見下すことが COVID-19感染者への偏見や差別意識を直接的に促進するのではなく、他の変数の効果を調整する役割の方が強いのかもかもしれない。このことは、風邪・インフルエンザに対する支持・援助的態度のみを弱めてしまうという独自効果にも表れており、より間接的な役割を示唆する証左とも見なしうる。

正義感の一側面としての社会規範については、3つの概念に分けて考察する。まず、自身の社会的規範順守意識は、COVID-19感染者への偏見や差別意識とは

無関係であった。また、配慮規範は両感染者への支持・援助的態度を促進するのに対して、風邪・インフルエンザ感染者への忌避・偏見の態度を緩和した。一方、公共規範は風邪・インフルエンザ感染者への支持・援助的態度のみを促進した。両者は、ルールやマナーを順守するという意味では、感染予防対策行動へのコミットメントとも重複する概念であり、実際に中程度の有意な正の相関 ($r=.369\sim.439, p<.001$) を示すが、感染予防行動には単にルールやマナーを順守するという志向性以外に、自身や周囲の大切な人の健康を守るためという成分が含まれているため、偏見や差別意識に対する効果が異なるのかもしれない。次に、他者に対する社会的規範順守の要求について、公共規範要求は COVID-19 感染者への偏見や差別意識のみを促進したのに対して、配慮規範要求は両感染者に対する偏見や差別意識を促進することが分かった。前者は、より公共的な色彩が強いことから、逸脱者への攻撃が正当化されやすいのに対して、後者は単にマナー上の問題であることから、あらゆる感染者への偏見や差別意識に広く敷衍されるのかもしれない。最後に、他者から社会的規範に反する行為をされたときに生じる怒りの感情や攻撃への衝動について、前者の非難や不快感のような感情的反応については、両感染症への偏見や差別意識との関連に違いが見られたのに対して、後者の攻撃衝動については違いがなかった。単に迷惑だけでは済まされない、致死率の高い感染者に対して、行動レベルよりは感情レベルでの反応が目立つが、両感染者に対する実際の報復行動への衝動との関連はそれほど変わりが無い点は、注目に値する。報復行動が感染拡大の解決につながらなければいかりか、むしろ有害であるという心理教育が有効であることを示唆するものとも言える。

ところで、正当世界信念は、事前の予測に反して、COVID-19 感染者への偏見や差別意識とは無関係であったのに対して、風邪・インフルエンザ感染者への偏見や差別意識のみを促進することが分かった。一方で、両感染者に対する支持・援助的態度を促進することも分かった。この知見は、わが国において「COVID-19 感染者は自業自得だ」という設問に対して首肯する者が他国に比して極めて多いという先行研究の結果（三浦他, 2020, 2021）とは一致しないように思える。このことから、正当世界信念の複雑な影響を垣間見ることができる。本研究からは、その影響の表れ方について何らかの結論を下すことは困難であるため、他の変数との交絡関係に注目しながら、さらな

る精緻な検討が求められる。

怒り表出については、両感染症に対するいずれの態度に対しても異なる効果が見られなかったことから、こうした偏見や差別意識の発露と相関があることだけが分かった。もとより、態度と行動の間には若干の乖離があることから、今後はこうした怒り表出傾向が実際の差別的行動を予測するかについて検討する必要があると思われる。本研究においては、統制変数としての役割が強いことから、本稿ではこれ以上は考察しない。

こうした相関関係は、必ずしも因果関係を表すわけではないが、他の感染症への偏見や差別意識にも共通して影響する概念だけでなく、COVID-19 感染者への偏見や差別意識に特有の独自効果を有する概念が特定されたことには意義があり、公衆衛生上の脅威を防止するためにも有用な知見を提供し得たと考えられる。今回の COVID-19 禍で、我々が過去の感染症禍で偏見や差別が問題となったことから、何も学んでいない（内田, 2021）ことが浮かび上がってきたと言える。喉元過ぎれば熱さを忘れるという諺を地で行かないように、心理学的観点からのさらなる検証が不可欠であると言える。

互いに他の変数の影響を統制した上で、各変数の偏見や差別意識への独自効果を検討するために重回帰分析を実施した結果、COVID-19 感染者に対する偏見や差別意識を直接的に促進・緩和する要因はかなり絞られ、先行研究からもその寄与が予測できた行動システムの活性化にまつわる 2 変数を除けば、相互独立的自己観と自己愛的甘えの 2 変数しか有意な影響が残らなかった。ただし、相関分析では有意な相関が見られたにもかかわらず、重回帰分析では標準偏回帰係数が有意でなかった他の変数群を単に偽相関であると片づけてしまうべきではない。というのも、他の変数の直接効果を媒介したり調整したりする可能性があるからである。本研究では、COVID-19 感染者に対する偏見や差別意識に直接的に寄与する要因を探索的に検討したに過ぎない。こうした影響は必ずしも直接的なものだけではなく、他の変数とは交絡関係にあるために、特定の条件が揃ったときに COVID-19 感染者への偏見や差別意識を押し上げる働きがあるのかもしれない。実際、COVID-19 への恐怖感が感染者への忌避・偏見の態度に及ぼす影響における規範要求意識（福井, 2021b）や正当世界信念（福井, 2021c）の調整効果が見出されている。本稿では紙幅の関係で様々な変数の交絡関係の分析結果については報告できないが、今後

さらに精緻に検証して報告する予定である。

本研究の限界と今後の課題

本稿では紙幅の都合で、COVID-19感染者への偏見や差別意識に寄与する可能性がある変数群の独自効果について探索的に検討したにとどまったため、前述したように各変数同士の交絡関係については未検討である。本研究で取り上げた変数群は互いに関連したり、交絡したりしながら、感染者への偏見や差別意識の充進に寄与していると思われる。今後は、各変数の相関関係や交絡関係を念頭に置いた包括的なモデルの構築が必要である。

また、本研究では、関連が予想される多くの変数群を用いたが、重要な観点が欠如していたと考えられる。新型コロナウイルス感染症の致死率が比較的高いことから、人類の多くが普段よりも死を意識したり、死の恐怖を感じたりしたと思われる。こうした状況下での人々のふるまいを予測するのに、存在脅威管理理論(例, Becker, 1973 / 1997; 脇本, 2012)の枠組みが有用であると考えられる。しかしながら、本研究では調査の準備に必要な時間の制約から、対象者がどの程度死の恐怖を感じたかを測定できなかった。本理論から、COVID-19による死の恐怖が喚起され、そのような生存上の脅威を緩和するために、品行方正に行動制限を受け入れ、唯々諾々と感染予防対策行動を実践する者を内集団と見なして同一化し、そうしない逸脱者を外集団と敵視して攻撃することが予想される。事実、COVID-19感染症よりも致死率の低い風邪・インフルエンザ感染者への偏見や差別意識は低かったことや、両感染者への偏見や差別意識と相関する変数が一部異なっていたことから、COVID-19が死の恐怖を喚起したせいで、感染者への偏見や差別意識を活性化した可能性は否めない。今後は、存在脅威管理理論の観点から、死の恐怖の程度と偏見や差別意識が共変する可能性についても検討が必要である。

さらに、本研究では、COVID-19感染者への偏見や差別意識の測定に自記式尺度を用いたが、近年では反応潜時を用いた潜在連合テスト(Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)などを用いて、その非意識的側面の測定が試みられている。本研究から、COVID-19感染者への偏見や差別意識は社会的望ましさと無相関であることが分かったが、そのこととは関係なく意識的・非意識的測度はそれぞれ同一概念の別の側面を予測することや、対象に対する態度から行動を予測する二重分離パターン・モデル(Perugini, Richetin, & Zog-

maister, 2010)によると、後者と行動的指標との相関が予測されることから、今後は意識的・非意識的側面のいずれをも含み、偏見・差別意識から実際の差別的行為までを包括的に含めたモデル構築が必要となるだろう。

附記

本研究は、日本健康心理学会第34回大会で発表された「新型コロナウイルス感染者に対する偏見や差別意識—寄与因の探索的検討—」(福井, 2012a)を再分析し、大幅に加筆・修正を加えたものである。また、他の学会発表(福井, 2012b, c)とも、一部データの重複使用がある。

謝辞

本研究は、2020年度甲南大学文学部人間科学科卒業生の瀬尾綾香さんの卒業研究の一環でデータを収集した。データの収集や整理に多大な協力を得たことに心より感謝を申し上げたい。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 阿形恒秀 (2021) 新型コロナウイルスといじめ問題—「感染に関わる差別」「感染防止に関わるストレス」といじめとの関連—。鳴門教育大学研究紀要, 36, 120-131.
- Ahorsu, D.K., Lin, Y.C., Imani, V., Saffari, M., Griffiths, M.D. & Pakpour, A.H. (2020) The Fear of COVID-19 Scale: Development and Initial Validation. *International Journal of Mental Health and Addiction*, 1-9. <https://doi.org/10.1007/s11469-020-00270-8>
- 安保則夫 (1989) ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム—社会的差別形成史の研究—. 学芸出版社.
- Becker, E. (1973 / 1997) *The denial of death*. New York: Free Press.
- De Girolamo, G., Cerveri, G., Clerici, M., Monzani, E., Spinogatti, F., Starace, F., Tura, G., & Vita, A. (2020) Mental health in the coronavirus disease 2019 emergency: The Italian response. *JAMA psychiatry*, 77(9), 974-976.
- 土居健郎 (1971) 「甘え」の構造. 弘文堂.
- 土居健郎 (2001) 続「甘え」の構造. 弘文堂.
- Duncan, L.A., & Schaller, M. (2009) Prejudicial attitudes toward older adults may be exaggerated when people feel vulnerable to infectious disease: Evidence and implications. *Analyses of Social Issues and Public Policy*, 9(1), 97-115.
- Duncan, L.A., Schaller, M., & Park, J.H. (2009) Perceived vulnerability to disease: Development and validation of

- a 15-item self-report instrument. *Personality and Individual Differences*, **47**, 541-546.
- Ehrlich, H.J. (1969) Attitudes, behavior, and the intervening variables. *The American Sociologist*, 29-34.
- Faulkner, J., Schaller, M., Park, J.H., & Duncan, L.A. (2004) Evolved disease-avoidance mechanisms and contemporary xenophobic attitudes. *Group Processes & Intergroup Relations*, **7(4)**, 333-353.
- 福井義一 (2021a) 新型コロナウイルス感染者に対する偏見や差別意識—寄与因の探索的検討—. 日本健康心理学会第34回大会発表論文集, 51.
- 福井義一 (2021b) 新型コロナウイルス感染症に対する恐怖感と正義感が感染者に対する偏見や差別意識に及ぼす影響. 感情心理学研究, **29(Supplement)**, S6-02.
- 福井義一 (2021c) 新型コロナウイルス (COVID-19) に対する恐怖心と公正世界信念が感染者に対する偏見や差別的態度に及ぼす影響. 第10回日本情動学会大会抄録集, 30.
- 福川康之・小田 亮・宇佐美尋子・川人潤子 (2014) 感染脆弱意識 (PVD) 尺度日本語版の作成. 心理学研究, **85(2)**, 188-195.
- Golberstein, E., Wen, H., & Miller, B.F. (2020) Coronavirus disease 2019 (COVID-19) and mental health for children and adolescents. *JAMA pediatrics*, **174(9)**, 819-820.
- Greenwald, A.G., Nosek, B.A., & Banaji, M.R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of personality and social psychology*, **85(2)**, 197-216.
- 速水敏彦 (2006) 他人を見下す若者たち. 講談社.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004) 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. 心理発達科学 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要), **51**, 1-7.
- 石井国雄・田戸岡好香 (2015) 感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討. 心理学研究, **86(3)**, 240-248.
- 磯田道史 (2020) 感染症の日本史. 文藝春秋.
- 梶谷康介・土本利架子・佐藤 武 (2021) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響—文献および臨床経験からの考察—. 健康科学, **43**, 1-13.
- 金子泰之 (2007) 逸脱者に対する攻撃的反応を生起させる規範意識の影響. 犯罪心理学研究, **45(1)**, 25-34.
- 北口末広 (2021) 新型コロナウイルス感染症禍の社会と人権—情報リテラシー・差別・政治の視点で—. 人権問題研究所紀要, **35**, 1-28.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986) 日本語版 Social Desirability Scale について. 社会精神医学, **9**, 173-180.
- 今野裕之・堀 洋道 (1998) 正当世界信念が社会状況の不正判断に及ぼす影響について. 筑波大学心理学研究, **20**, 157-162.
- 厚生労働省 (2020) 「新しい生活様式」の実践例.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 (2009) 高校生における仮想的有能感といじめとの関連. 教育心理学研究, **57(4)**, 432-441.
- 三浦麻子・平石 界・中西大輔 (2020) 感染は「自業自得」か—状況の力の解明に挑む— (特集 新型コロナウイルス感染症とコミュニケーション). 科学, **90(10)**, 906-908.
- 三浦麻子・平石 界・中西大輔・Andrea Ortolani (2021) 新型コロナウイルス感染禍に対する態度の国際比較—「自業自得」「自粛警察」は日本にユニークなのか—. 日本社会心理学会第62回大会発表論文集, 199.
- 向井智哉・三枝高大・小塩真司 (2017) 厳罰傾向と“非合理的な”思考. 法と心理, **17(1)**, 86-94.
- Müller, M.M. (1993) Fragebogen zur Erfassung des habituellen argerausdrucks: Das Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ). *Z Diagn Differ Psychol*, **14**, 205-219.
- Murayama, A., Miura, A., & Furutani, K. (2021). Cross-cultural comparison of engagement in ultimate and immanent justice reasoning. *Asian Journal of Social Psychology*.
<https://doi.org/10.1111/ajsp.12510>
- Murayama, A., & Miura, A. (2021) Religiosity and immanent justice reasoning: A replication study in Japan and the US. *Japanese Psychological Research*.
<https://doi.org/10.1111/jpr.12367>
- 中野信子・ヤマザキマリ (2020) 差別と偏見, 自粛警察, 正義中毒...コロナでバレた先進国の「パンツの色」. 文芸春秋, **98(7)**, 234-243.
- Navarrete, C.D., Fessler, D.M., & Eng, S.J. (2007) Elevated ethnocentrism in the first trimester of pregnancy. *Evolution and Human Behavior*, **28(1)**, 60-65.
- Neuberg, S.L., & Newsom, J.T. (1993) Personal need for structure: Individual differences in the desire for simpler structure. *Journal of personality and social psychology*, **65(1)**, 113-131.
- 西 和久 (2000) 若者のエイズに対する態度構造についての調査研究. 日本エイズ学会誌, **2(3)**, 177-183.
- 沼田 潤・井上智義・朱 虹 (2011) ネガティブなイメージを持たれている外国に対する偏見を低減する写真提示の効果. 人間環境学研究, **9**, 53-62.
- 大治朋子 (2020) 歪んだ正義 「普通の人」がなぜ過激化するのか. 毎日新聞出版.
- 岡田 俊 (2021) COVID-19 が児童・青年のメンタルヘルスへ与える影響. 臨床精神薬理, **24(10)**, 1011-1016.
- Oshio, A. (2009) Development and validation of the Dichotomous Thinking Inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, **37**, 729-742
- 小塩真司 (2010) 二分法的思考尺度 (Dichotomous Thinking Inventory) の特徴—これまでの検討のまとめと日常生活で重視する事柄との関連—. 人文学部研究論集, **23**, 45-57.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・宇津木成介・山崎勝

- 之・大芦 治・坂井明子・西 信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人 (1999) 日本版 Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討. *感情心理学研究*, **7(1)**, 13-24.
- 大和田智文・鈴木公啓・川田素子 (2013) 大学生活における被奉仕志向性尺度の作成. *関西福祉大学社会福祉学部研究紀要*, **17(1)**, 37-49.
- Perugini, M., Richetin, J., & Zogmaister, C. (2010). Prediction of behavior. In Gawronski, B. & Payne, B.K. (Eds.), *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications*, (pp. 255-277). New York: Guilford Press.
- Quervain, D.D., Aerni, A., Amini, E., Bentz, D., Coynel, D., Freytag, V., Gerhards, C., Papassotiropoulos, A., Schicktan, N., & Schlitt, T. (2020) *The Swiss Corona Stress Study: Second Pandemic Wave*. OSF Preprints.
- 齋藤雅俊 (2020) 自己責任という暴力: コロナ禍にみる日本という国の怖さ. 未来社.
- Schaller, M. (2011) The behavioural immune system and the psychology of human sociality. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, **366(1583)**, 3418-3426.
- Schaller, M., & Duncan, L.A. (2007) The behavioral immune system: Its evolution and social psychological implications. In J.P. Forgas, M.G. Haselton, & W. Von Hippel (Eds.), *Evolution of the social mind: Evolutionary psychology and social cognition*. New York: Psychology Press. pp. 293-307.
- Schaller, M., & Park, J.H. (2011) The behavioral immune system (and why it matters). *Current Directions in Psychological Science*, **20(2)**, 99-103.
- 志賀直哉 (1919) 流行感冒と石. 白樺の林, 4月号, 127-166.
- Shigemura, J., Ursano, R.J., Morganstein, J.C., Kurosawa, M., & Benedek, D.M. (2020) Public responses to the novel 2019 coronavirus (2019-nCoV) in Japan: Mental health consequences and target populations. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **74(4)**, 281.
- 太刀川弘和・根本清貴・田口高也・高橋あすみ・小川貴史・白鳥祐貴・高橋 晶 (2020) 新型コロナウイルス恐怖尺度について. 筑波大学災害・地域精神医学. <https://plaza.umin.ac.jp/~dp2012/data/fcv19sj.pdf>
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996) 相互独立の—相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成. *奈良大学紀要*, **24**, 157-173.
- 辻村 (伊藤) 貴子 (2021) 新型コロナウイルス感染症と法の関わり—日本における行動制限措置と偏見差別をめぐって—. *IATSS Review (国際交通安全学会誌)*, **46(1)**, 22-31.
- 内田博文 (2021) 感染症と人権—コロナ・ハンセン病問題から考える法の役割—. 解放出版社.
- Wakashima, K., Asai, K., Kobayashi, D., Koiwa, K., Kamoshida, S. & Sakuraba, M. (2020) The Japanese version of the Fear of COVID-19 scale: Reliability, validity, and relation to coping behavior. *PLOS ONE*, **15(11)**: e0241958. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0241958>
- 脇本竜太郎 (2012) セレクション社会心理学—27 存在脅威管理理論への誘い—人は死の運命にいかにか立ち向かうのか—. サイエンス社.
- 渡邊 慧・森本浩志 (2021) 大学生の認知症に対するステイグマと思考抑制傾向および仮想的有能感の関連. *明治学院大学大学院心理学研究科紀要*, **26**, 35-42.
- 山縣芽生・寺口 司・三浦麻子 (2021) COVID-19 禍の日本社会と心理—2020年3月下旬実施調査に基づく検討—. *心理学研究*, **92(5)**, 452-462.
- 八木晃介 (2021) 新型コロナウイルスのパンデミックにおける差別と偏見. *人権教育研究*, **29**, 117-141.
- 山本真菜・岡 隆 (2021) 新型コロナウイルス感染者に対するステレオタイプと行動免疫システム活性化の個人差との関連. *心理学研究*, **92(5)**, 360-366.
- 山本将士 (2007) 仮想的有能感からみた高校生のいじめ. *人間文化研究*, **8**, 191-205.
- 四方田健二 (2020) 新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やストレスの実態: Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から. *体育学研究*, **65**, 757-774.

Appendix 1 本研究で用いられた日常的な感染予防対策行動を測定する尺度の内容

項目 No.	項目内容
1	換気が悪い場所には行かないようにしている
2	他の人と、近い距離での発話をしないようにしている
3	人がたくさん集まっている場所には行かないようにしている
4	外出する際はマスクをするようにしている
5	せきやくしゃみをする時は、マスク・ハンカチ等を口に当てるようにしている
6	社会的距離（人との距離を2m（最低1m）空ける）を意識して行動している
7	外出前に体温を測るようになっている
8	感染が流行している地域からの移動、感染が流行している地域への移動は控えるようになっている
9	地域の感染状況に注意するようになっている
10	家に帰ったら手洗い・うがいをするようになっている
11	家に帰ったら顔を洗うようになっている
12	まめに手洗いもしくはアルコールによる手指消毒をするようになっている
13	公共交通機関での会話は控えるようになっている
14	大人数での会食は避けるようになっている
15	外食の際は隣と一つ飛ばしで座るようになっている
16	外食の際は対面を避け、互い違いに座るようになっている
17	混雑を避けて買い物をするようになっている

Contributors to prejudice and discrimination against COVID-19 infected people in Japan: Exploratory study among university students

Yoshikazu Fukui

Abstract:

Increasing prejudices and discrimination against COVID-19 infected people that are not responsible for the infection are reported with the spread of the illness in Japan. These prejudices and discriminatory attitudes threaten public health because they pressure people to keep their infection status hidden from the public. It is necessary to examine contributors to prejudices and discriminatory attitudes toward COVID-19 infected people to take countermeasures against these problems. This study investigated possible contributors using variables predicted to be associated with prejudices and discriminatory attitudes toward COVID-19 infected individuals. An online survey was administered with 245 university students. The results indicated that the university students generally suppressed prejudices and discriminatory attitudes, and that behavioral immune system, fear of COVID-19, dichotomous thinking, cultural view of the self, narcissistic “amae” (indulgence), and the sense of justice contributed to prejudices and discrimination. We have discussed these contributors by categorizing them as factors that are common to cold and/or influenza infection and that are specific to COVID-19 infection.

Keywords: COVID-19, prejudice, discriminatory attitude, university students